論　説

「了却天下事・贏得身後名」「只争朝夕・常懐千歳憂」：指導者の自意識と強迫観念（Ⅰ）

夏　　剛

「春蚕到死絲方尽，蝋炬成灰涙始乾」

チトーが好く孤島に住んでいたのは暗殺防止の意図も有ると言うが，共産圏特有の緊張と共に別の執着も有った。政界を引退した80歳のチャーチルは，18歳年下のチトーが思う存分に葉巻や酒を嗜（たしな）んでいるのを見て，何故そんなに若さが続くのかねと悲しそうに聞いた。後者が若く見える半分の理由は髪を染めていた故だ，と此の場面を記したニクソンは言うが，チャーチルは答えを待たず，「権力が若さを保つのだ」と一人合点した[1)]。

政治の世界，而も終身独裁制に於いては，当時のチトーは老境に程遠かったが，84歳の岸元首相の怪気炎は，違う角度からチャーチルの説を裏付けた。彼は大きなローストビーフを平らげ，去年まで女の方は現役だったと披露し，21歳年下の田中角栄を驚かせた[2)]。中国では「食色，性也」と言う様に，食欲と性欲は人間の基礎的な本能とされる。其の性事の逸話は野暮ながら，政治家の旺盛な活力の源 ── 生涯現役の野望を窺わせた。

戦国時代の武将・廉頗は，老いても指揮の能力が有る証に，君主の使者の前で食事を無理に沢山取った。席上３回も便所に立った事で，体力が懸念され願いは適わなかったが，老兵の「要強（つよがり）」は微笑ましい。ナポレオンの「元帥に成りたくない兵士を良くない兵士だ」，毛（もう）の「要立新功」の檄に即して考えれば，新しい功労を立てたくない元帥は良い元帥ではない。「一将功成万骨枯」と言うが，成功した将や新しい功労を目指す将は枯れぬ。

ニクソンは「善人＝偉大な指導者」の等式を否定し，指導力とは倫理的には中性的な力や機略であり，「色男，金と力は無かりけり」は政治の世界でも常識だ，と断言した[3)]。此の「色男」とは好男子・美男だが，好色な男・色事師の「色男」は，「寡人有疾，寡人好色」や「婊子無情，戯子無義」の文脈と通じて，力と金の優位を肯定する者だ。「四川善人」[4)] ならぬ鄧の「黒猫・白猫」論は，精力絶倫・勢力絶大の全的な欲望の所産だ。

長征が終わった頃に，毛は周と鄧に指示を与えた後，２人のフランス苦学の体験を訊ねた。「労働を学びました。５年間，次々に色々な工場で辛い仕事をしました」，と鄧は謙虚に答え

た。其の返答が気に入った毛は，「フランスの女は綺麗だそうだな」と機嫌良く聞いた。周は悪い冗談への返答に窮したが，鄧が即座に応じた。「そんな事無いでしょう。女は皆同じです。特に暗い処では。」毛・鄧は大笑し，周は気拙い笑みを浮かべた[5)]。

孟子の「天降大任」の第一歩は，「苦其心志，労其筋骨」である。異国で其の試練を受けた鄧の経験は，「鉄鋼公司」の基を成した。「空乏其身」「動心忍性」「曾益其所不能」は，不能・不感症の真空化を意味せぬから，此の逸話の中の謙虚と露悪は表裏一体だ。政治評論家・早坂茂三（田中角栄の元秘書）は，政治家は「悪党」に限ると言い切った[6)]。周の此の聖人君子ぶりは，彼が槍玉に上げた政権担当の意志の無い野党[7)]と重なるか。

クリントン大統領は99年10月，「私はもう選挙には出ないが，もう一度出られたらなあと思ったりします」と，任期が残り１年余と成った職位への未練を吐露した。大統領の３選は米国憲法で禁じられるだけに，禁断の夢と言えようが，曾て周恩来もニクソンに再々出馬を勧めた。３選の禁則を知らされると，４年の間を置いて次の次を狙えば良いと助言した[8)]。抜け道に着目した其の抜け目の無い着想は，如何にも中国の権力者らしい。

中国では「男の花道」の発想は無い，という見方は概ね正しい。胡耀邦が71歳で失脚した遠因には，80代の鄧小平に完全引退を勧告した事が有ると言う。鄧を頭（かしら）とする８人の老革命家に由る院政 ── 「８老治国」は，80年代の中国の最大な忌諱（タブー）であり，危機の深い根源だったが，例の「昭和の妖怪」の余熱や，引退後は「球拾い」に徹すると言いつつ，「大元老」面（づら）で口を挟み続けた中曽根康宏を思い起すと，奇々怪々とは断じ切れぬ。

武田泰淳は滅亡体験で培った中華民族の叡知を，複雑で成熟した女体の情欲に譬えた。中国の熟語は益々（ますます）盛んな熟女の情欲を，「三十如狼，四十如虎」と形容する。政治生命は単純に比較し難いが，周が３選を勧めた時のニクソンは59歳だった。54歳で退く予定はクリントンにとって，大変な殺生に違いない。ナセルは訪中の田中首相と同じ52歳で逝ったが，ソ連の重圧に殺されたのだと周が激昂した[9)]程，惜しまれた異例の若死だ。

「知天命」の歳頃に人生の幕が降りる事は，昔の乱世では珍しくない。チャーチルの首相就任の契機と成った世界大戦の勃発から丸６百年前の1339年，不屈の精神と巧妙な権謀術数で名高い専制君主・後醍醐天皇が51歳で逝った。毛の権力が挑戦された盧山会議の601年前の1358年，天下を轟かした室町幕府初代将軍・足利尊氏が53歳で死去した。気宇壮大な３代将軍・義満が亡くなったのも，50歳（1408年）の事である。

更に，ニクソン衝撃（ショック）と中曽根政権誕生の丸４世紀前に当る1573，1582年，武田信玄と織田信長が其々52歳と48歳で死んだ。後者は切腹の際に，出陣の折に舞った謡曲・『敦盛』を口にしたと言う。「人間五十年，下天の内に比ぶれば，夢幻の如く也。」『広辞苑』の「人生」の成句に有る「～（人間）僅か五十年」は，其処に由来したと思うが，隣の「人生七十古来稀」（杜甫）と比べれば，日中の人生観の伝統の違いを感じる。

本能寺で明智光秀の謀反を聞いた信長は，相手の知謀・力量を熟知しただけに，「是非に及ばず」（仕方が無い）と呟いた[10]。毛沢東も林彪一味の陰謀を警戒し，例の熊向暉から中米秘密交渉に就いて報告を受ける前に，林彪の手先の動態を根掘り葉掘り聞き出したり[11]，一連の南巡講話で先手封じを講じたりしたが，実際に林がソ連へ逃げ出す段と成ると，「天要落雨，娘要嫁人」（天は雨を降らし，年頃の娘は嫁に行く物だ）と言った。

林の特別機が間も無く国境を出ようとする際に，処置の指示を仰ぐ周に対する此の答えは，撃墜を否決する間接表現だとされている。裏を返すと，ＮＯ．２と雖も「叛党叛国」の罪を犯せば，問答無用の極刑で罰せられかねない。毛が其の非情な非常手段を放たなかったのは，合理的な説明が付き難い事柄の複雑さや，「親密戦友」の離反に因る衝撃・傷心で，遂に踏み止まった苦渋の選択にも映るし，天に任せる哲人の諦観とも思われる。

後醍醐天皇は右手に御剣，左手に『法華経』を持って他界し，足利尊氏は強靭な意志と無欲・寛容を兼ね備えた。「大和魂」も戦闘的な「勇猛」，恬淡な「潔い」の両面が有る。最晩年の毛は早期の詩の決定版を検討する時に，昔の謹厳さが消えて字句の推敲を止した[12]。林彪事件の打撃で急速に健康が衰え，意気軒高な風采が風化した結果だが，「天要落雨，娘要嫁人」と言う無為の決断にも，「力不従心」の鈍さと悔しさが滲み出ている。

江戸時代の名判官・大岡忠相は，訴訟の裁断に必要な人情の機微を確かめる為に，女の性欲は何時まで続くかと母親に聞いた。母親は何も言わず只火箸で灰を掻いたが，灰に成るまでだと彼は悟った。李商隠の「春蚕到死絲方尽，蝋炬成灰涙始乾」（春蚕（しゅんさん）　死に到って絲方（いとまき）に尽き，蝋炬（ろうきょ）　灰と成って涙始めて乾く。目加田誠訳）も，纏綿・執拗な愛情の暗喩と取れるが，周恩来は此の名句を座右の銘に，無定量・無際限の奉仕に励んでいた。

40代前半の例の会話でフランス女性への興味を覗かせた毛は，81歳でフィリピンのマルクス大統領夫人と会見した際に，突然相手の手を取り上げて軽く接吻した[13]。周囲を驚かせた悪戯（いたずら）は「猴気」らしいが，人類の先祖 ── 猿は性的な欲求の凄い動物だ。蘇軾の「老夫聊発少年狂」（老夫　聊か　少年の狂を　発し）が連想されるが，気力の限界を意識した最後の闘争 ── 「文革」とも似て，其の衝動的な激情は最後の浪漫と言うべきだ。

享年92の鄧小平は毛と周より，其々10歳と15歳も長生きした。改革・開放を促す彼の南方視察は，86歳の最後の闘争としても「史冊」（歴史の記録）に残る。長男・鄧朴方（中国身体障害者福祉基金理事長）は其の後，「父の政治観は“炉火純青”，名人の域に達している」と論評した[14]。『角川大字源』の守備範囲からも漏れた「炉火純青」は，混じり気の無い青い囲炉裏の火を以て，究極の円熟・練達の境地を形容する成語だ。

鄧の表現には言外の意が有り，耳で聞こえなくても感じられる，と言うのが息子の見方の根拠だが，彼の親友で同じ「文革」世代の中共研究家・楊炳章（ベンジャミン・ヤン）は，此の様に指摘した。「名人の域」の形容は老人にとって，完熟した林檎（りんご）や太り切った家鴨（あひる）と同じく，必ずしも良い意味で

はない；路線と人事を決めた後は何もする必要が無く，只時々指導すれば良い，こんな最晩年の鄧の流儀は，高齢等の理由でもう何も出来ないという事にも成る[15]。

李商隠の「夕陽無限好，只是近黄昏」は，「炉火純青」の幽玄・有限の両面をも表わせる。老いた鄧の「言外之意・耳外之音」から，田中角栄の首相退陣声明の中の「一夜，沛然として降る豪雨に心耳を澄ます思い」を思い起す。秘書・早坂茂三に由る原案の「耳を澄ます」の前に，岸や中曽根等の数人の首相の導師・安岡正篤が「心」を加筆した[16]。語り継がれて行く老練な画龍点睛だが，現実は此の名台詞の様な取り澄ました事ではない。

癌に罹った周恩来は透き通る感じに成った[17]が，瀟洒にも見える枯れ・透徹は肉体の消耗の結果だ。田中首相の辞意の引き金の１つも，外国訪問の強行軍を含む激務と体の限界だ[18]。気配りの名人・周も最晩年には，自らが空港まで国賓を迎送する慣例を廃止した。「文革」後の鄧が最高位に就こうとしなかった理由には，１日８時間の執務は無理だという自覚も有った[19]。特殊な材料で造られた「鋼鉄公司」も，金属疲労を恐れるわけだ。

「一万年太久，只争朝夕」

林彪逃亡の際の毛の「天要落雨，娘要嫁人」は，大人の泰然と老人の淡然が交じった反応か。但し，燃え尽きに対する警戒は逆に，最後の点火の契機へ転化する時も有る。毛と周は遣り残した仕事の多さと人生の残り時間の少なさを，ニクソンの前で何度も嘆き，迫る死期を覚悟している様な印象を与えた[20]。「多少事，従来急；天地転，光陰迫。一万年太久，只争朝夕。」彼の此の名句を中国で引いた処に，米大統領の同じ波長が窺える。

1963年に書いた此の詞（うた）は，中ソの意識形態（イデオロギー）論争の最中の「戦闘檄文」だ。目下の此の論争は１万年後に結論が出れば良い，と毛は鷹揚に言ったが，「多少の事は，従来急にして；天地転り，光陰　迫り。一万年は太（あまり）に久しければ，只　朝夕を争わん」（竹内実訳）と合わせて，複眼的な時間感覚や人生観を浮き彫りにする。此の吟詠の切迫感は国家の内憂外患ばかりでなく，満70歳を目前にした自身の死滅の危機感にも帰着できよう。

自分の後継者は劉少奇で私は彼の「附臣」だ，という1961年の毛の明言は，同じ前出のモンゴメリー元帥に語ったのだ。彼は俗語の「七十三，八十四，閻王不招自己去」（73，84歳に成ると，死神に呼ばれなくても自ずと行く）を持ち出し，73歳にマルクスと会いに行くよう５ヵ年計画を立てたと宣言した。老人の厄年とされる２つの節目は，孔子と孟子の享年が由来なので，「畏聖」の謙虚と「斉天」の貪欲が同時に感じ取れる。

モンゴメリーは『広辞苑』には載っていないが，「史上最大の作戦」を指揮した殊勲に因り，中国では注目される英雄の部類に入る。蒋介石と同じ年（1887）に生まれ，毛と同じ年（1976）に逝去した彼は，古稀を過ぎた1958年に引退し，訪中の際は74歳だった。中国流では第１の厄

年を乗り越えた事に成るから，毛は安心して例の諺を聞かせたわけだ。元帥は特殊な人物だから百歳まで生きられよう，とも付け加えた[21]。

中国人は百歳を天寿の一応の極限とするが，数え歳68であった毛は既に，「百年之後」（死後）の事を思案し始めた。73・84の厄年も「虚歳」（数え歳）だが，旧・新暦に因る年齢の虚・実は，中国的な人生観の重層を示唆する。「長命百歳」の祈願は常に理想や社交辞令に過ぎず，古稀か孔・孟の享年辺りこそが常識的な終点だ。50歳を「半百」と言うのも，人生百年の前提の上に立つが，「年過半百」は老化の加速の意味が強い。

諺の「人過三十天過午」は，30過ぎの人を正午過ぎの日に見立てる。毛は「文革」中「永遠に沈まぬ太陽」と賛美されたが，53歳の彼は若者を午前８，９時の太陽に譬え，「朝気蓬勃，正在興旺時期」（鋭気満々，正に元気旺盛の時期に在る）故に，世界は若者が負う物である，と語った。「年富力強」は若い世代の資本に違いないが，「午後１時の太陽」だった彼なら実感できた様に，最盛期を過ぎれば余生も余力も目減りする一途だ。

毛は例の５ヵ年計画の３倍に当る15年後，２番目の厄年の直前の数え歳83で他界した。党主席就任後41年経った事と合わせて，建国時に決まった中央警備団・「8341部隊」の番号を，其の生涯を予告する暗示と捉える向きも出た[22]。占術の書・『易経』が伝統思想の元祖を成す中国らしい見方だが，其の神秘な数は「天降大任」の正統性を裏付ける天意とも取れるし，如何なる偉人でも無限を享受できぬという摂理の証でもある。

毛の「帰天」（天に召されること）の日付 ── ９月９日は，割算の「九九帰一」の字面と符合する。中国流の掛算の口訣 ── 「九九法」は，「一一得一」（１×１＝１）で始まり，日本流と同じ「九九八十一」で終わる。１桁の数の２乗の最大値 ── 81（９×９）は，起点の１に帰る終点なのだ。象徴的な事に，「九九」は日本語では「区区」（小さくて詰まらぬ様）と同音であり，中国語では「久久（ジョウジョウ）」（久々。長々。永久）と同音である。

桃太郎の昔話と『西遊記』の組み立ての類似に着目した内山完造は，両者の相違点を指摘した。彼の論考の通り，前者は財貨掠奪の征伐を謳歌する軍国主義的な匂いがし，時間と距離を無視し，人物の設定も物語の量も全く空であり，後者は仏典取りの旅を礼賛する文化的な香りが漂い，実在の人物を中心にし，10万８千里・14年に亘る九九＝81回の人間生活路上の難行苦行を扱った物だ[23]が，其の対極は両国の発想様式の好例に成る。

唐僧一行が目的地に着き仏典を貰った後，観音菩薩が其の「歴難簿」を点検した処，其までの受難は80回だった。仏門の「九九帰真」の教義に拘る観音は，一難の追加を命じた。慈悲の代名詞たる彼女の意地悪は，「聖僧」に対する「天降大任」の逆説的な親切か。天安門の門の飾りの大きな丸い釘も横・縦各９列だが，１桁の最大の陽数の相乗から成る81は，此の様に究極の達成の象徴に用いられるが，栄・盛の極みは枯・衰に繋がる。

『易』に基づく占術の論理では，起点の１は未知数なので問題に成らず，頂点の９は反落の

危険を孕むので敬遠され，中庸で将来性に富む５，６が最良とされる[24]。思えば，９の黄金分割率（×0.618＝5.56）は，５と６の中間値と吻合する。長征中の1935年の政変で党主席に成った時，毛は第２の厄年の半分に当る満41だったが，数え歳84の黄金分割率＝51.9（満50.9）は，百歳のマラソンの折り返し点に近い。

「文革」を起す数え歳73の毛は，夫人への私信の中で若い頃の詩を引いた。其の「会当水撃三千里，自信人生二百年」は，「英傑・特殊材料」の自負と共に，「白髪三千丈」式の誇張・拡張志向の現われだ。「会当」（然るべし）と言う「水撃三千里」は，『荘子』の大鵬の壮挙が原型である。ところが，壮年の並み外れた想念への回顧は，国際共産主義運動の退潮を見通した末期の眼と同じく，常人の人情が滲み出た挽歌にも聞こえる。

常識的な天寿の限界の倍に当る「二百年」は，飛んでもない超人願望であるが，古稀を超える80歳は中国では「半寿」ともされる。160歳まで生きようという大欲から観れば，「半百」の50歳を終点とした古代日本の人生観は，乱世の宿命とは言え淡泊過ぎる。80代の松下幸之助の「半寿」宣言[25]は，大風呂敷と判っていても格好が良いが，本気で21世紀までの長生を願った[26]「経営の神様」も，昭和の終焉と共に94歳で逝った。

香港返還を目前に享年92で他界した鄧も80歳の頃からは，「革命楽観主義」と長寿願望が寧ろ一層に強まったが，松下幸之助より１つ年上の毛は80歳の前から，神様からの招待を頻りに真剣に口にした。逃れぬ死に直面する徹底的な唯物主義者らしいが，個人崇拝が熱狂の頂点に達した「文革」の初め頃，「万歳！万万歳！」「万寿無疆！」の賛辞が毛に捧げられている最中でも，彼の寿命に就いて冷静な見通しを持つ人が多く居た。

毛を利用する為に個人崇拝を演出した林彪は，66年５月の党中央政治局拡大会議で斯(か)く述べた。毛主席の言葉は一字一句とも真理であり，其の一言は我々の一万言よりも勝る；毛主席は90歳まで生きようと，百歳余りまで生きようと，我が党の最高領袖である事は変わらぬ；彼の「身後」（逝去後），（スターリン死後の）フルシチョフの秘密報告の真似をする者が居れば，其は野心家，大悪党だから，党・国家を挙げて打倒すべきだ，と。

90歳や百歳云々は，毛の命もやがて終わる事を意味するから，考え様に由っては失敬の嫌いが有る。ところが，毛が其の直後の例の書簡で吐露した林の演説への反発は，此の無礼ではなく大袈裟な慇懃の方だ。有り得ぬ「万寿無疆」に比べれば，「長命百歳」は控え目な表現とも言える。此の言い回しが逆鱗に触れぬばかりか，精一杯の祈願たり得たのは，人生・人情の機微を心得て，ギリギリの現実味を込めた希望的な観測である所以だ。

百歳前後の見積もりも水増しの節が有るが，「万歳」の虚言を否定する意味では，「実話」（本音）の方に属する。建前と本音，理想と現実の二重基準は，中国では一種の常識なのだ[27]。中国人の「外儒内道」や中共の「外毛（沢東）内周（恩来）」に触れたが，「冷看『論語』，熱読『孟子』」[28]と言う様に，上昇志向を特徴とする儒教の中にも温度差が有る。逆に，枯淡の

形象（イメージ）が強い道教に於いては，荘子は気宇壮大な風狂精神を持つ。

熱し易く冷め易い「日本病」[29] と違い，中国人の冷・熱は魔法瓶の「外冷内熱」の様に，対立・統一の同居が常態である。毛の勇敢・智恵の「虎気」と浪漫・悪戯（いたずら）の「猴気」も，相互補完の二極を成していた。絢爛たる文様や堂々たる威風で陽の代表格とされる虎も，冷静・隠棲の習性に陰性が隠れる物だ。後漢の許慎は此の「山獣の君」の字形に就いて，「虎足は人の足に象（かたど）る」と述べた[30] が，中共の「脚踏実地」精神と奇妙に通じる。

我々は倶に足が地に着く政治家だ，とニクソンは別れ際に毛に語った。見送る毛は歩行困難の理由として，体が良くない事を打ち明けた。お元気そうに見えます，と賓客が「客套話」（お世辞）を言うと，外見なぞ当てに成らないと彼は答えた。「表面現象是騙人的」と訳された[31] 此の言葉の原文は，「外強中干」とも言われる。格言の「人之将死，其言也善」の通り，米大統領と交わした其の最後の一言は，余裕の自嘲を超える真実なのだ。

「蝋炬成灰涙始乾」を地で行くかの様に，毛の肌色は実は蝋の様に映る薄黄色だった[32]。談義の興味が益々（ますます）湧くのに反して，疲労の色も彼の「超人（スーパーマン）」に濃く現われた。隣の周は頻りに時計を覗き，賓客に終了を暗に催促した。「打倒帝国主義・修正主義・反動派」等の呼び掛けを自ら「空砲」と断じた処にも，疲れた故の毛の素直さが感じ取れるが，伝家の宝刀が遂に抜かれた天安門事件の武力鎮圧の通り，空砲の裏に常に実弾が控える物だ。

「此一時也，彼一時也。此亦一是非，彼亦一是非。」

中国人は商談や売買で，好く売り手が飛んでもない値段を吹っ掛け，買い手が相場や予算に基づいて希望を出す。其の「漫天要価，就地還銭」の法則も，「天馬行空・脚踏実地」の二極の変種に思える。双方の乖離の大きさや，其にも拘らず妥協に落ち着く場合が多い事は，外国人には奇異に映るが，虚実皮膜や阿吽（あうん）の呼吸こそが中国の複雑系の奥義だ。「１句頂１万句」云々を聞けば，１万句は１句に当ると裏読みをする習性は中国に有る。

「万歳，万万歳」と百歳との百倍，百万倍もの差よりも，前者を後者へ換算する発想に注目したい。「乗法（かけざん）」と「除法（わりざん）」，「加法（たしざん）」と「減法（ひきざん）」の使い分けは，中国人のいい加減さと加減の良さを生み出す。日本的な「縮み」志向に対して，中国では「拡がり」志向が目立つが，「外強中干」ならぬ「外拡張・内濃縮」も一方に有る。「80歳＝半寿」説を正面（まとも）に信じる者は余り無く，80歳を「全寿」とし其の道程の半ばを気にする者が多い。

毛はニクソン訪中の翌年の党大会で，「万歳，万万歳！」の歓呼を満喫したが，退場しようとした時は足に力が入らず，席から立ち上がれなかった。自尊心が異様に強い彼は衆目環視の中で，人の扶助を頼るわけには行かなかった。千人余りの代表を先に退場させ彼が其の儘で見送る，という周恩来の機転に由る非常手段で，辛うじて体面を保った[33]。翌74年に彼は白内障

でほぼ失明したが，此が「実歳」（満）80の老人の残酷な真実だ。

「三十如狼，四十如虎」の盛りと重なるが，厄年の73，84の半分は30代後半と40代前半だ。絶頂の運勢や勢いを形容する成語には，「日方中天」（日が方に天の中央に在る）と有るが，次の「日過中天」は下降の始まりだ。午後２，３時の太陽は季節に由って，正午並みの灼熱を持ち得るが，日没へ向う前の焦燥が混じ合う様に見える。毛の晩年の「亢龍在天，有悔」（『易経』）も，「頂峰」の地位と「締切」意識が要因に思える。

ニクソンが「只争朝夕」を引いて，時機を掴める毛の機敏さを讃えた処，毛は万更でもない顔でキッシンジャーを指し，「只争朝夕」とは彼の事だと言った[34]。パリでの艶聞を偽装に[35]中国の門を潜った忍者的な行動力を指すのだろうが，其の年齢（48歳）からすれば，「半百」を加速度的な再出発の起点と見做す考えも窺える。中米秘密交渉で周が52歳の熊向暉を起用したが，此の年齢は彼が期待した「年富力強」の境界線に近い。

鄧の改革・開放路線が発足した直後に，欧州史上初の女性宰相が英国で誕生した。党首に貴族や上流階級出身者が多い保守党の伝統に照らすと，庶民出身のサッチャーは異色の存在である。「鉄の女」の威名は50歳の頃に，ソ連の海軍力の増強に警告を発した事から，「鉄幕（てつのカーテン）」の後ろの超大国から付けられたのだ。首相就任は更に３年後の事だが，高福祉・高負担の「英国病」を退治する其の辣腕は，「半百」故の充実さと無縁ではない。

鄧の69歳誕生日の73年８月22日，キッシンジャーは国務長官に就任した。２日後に開幕した例の党大会で鄧は復権が確認されたが，76年の失脚で再び光陰の空費を余儀無くされた。名誉回復を遂げた「文革」後の彼は，国と自分の時間の挽回に全力投球した。江青等との「鋼鉄公司」対「鋼鉄公司」の闘いを彷彿とさせて，鄧は82年の談判で56歳のサッチャーを圧倒した。78歳の経験よりも，78歳の気迫の結果と言うべきか。

84年12月19日，中・英首相は香港返還協定に調印した。マカオも15年後の同じ日に，中国へ戻る事と成った。鄧外交の集大成なる２つの快挙は，中華民族の百年の屈辱に終止符を付けた。鄧は「千古罪人」の悪評を在任中に回避でき，至高・永遠の試験官 ── 歴史に立派な答案を出したわけだ。奉公の終着駅や「百年之後」が近付く中の奮闘と勝利は，正に「天降大任」の天職意識や「人死留名」「只争朝夕」の強迫観念の賜物だ。

キッシンギャーとの初回の秘密会談を終えて，周恩来は毛沢東に１時間余り報告した。米国側は始めは緊張気味で，台湾問題に就いて資料を多く用意した，と冒頭で述べた処，毛は斯（か）く言って話の方向を変えた。「儂（わし）が思うに，台湾問題は小さい事で，世界の情勢が大事だ。台湾に就いての論議は，百年先送りしても構わん。先ず世界の枠組みの大問題から話そう。」[36] 其の彼一流の大らかさは，７ヵ月後のニクソン訪中の際に豹変した。

首脳の合意を得た公報の発表の前夜，領袖会談に長官が呼ばれず面子が潰れた国務省の横槍で，米国側は多くの語句の修正を要請した。周は中米接近の戦略的な意義を考えて，譲れる処

は譲る心算（つもり）だったが，毛は釘を刺した。「他の部分は商量の余地は有るが，台湾に関わる処は譲れない。」[37]。破談も辞さぬ強硬さと相手を立てる柔軟さを以て，中国側は鉄則を堅持しつつ妥協したが，矛盾する様に見える毛の２回の反応も似た二刀流だ。

学問の伝統から共産党の「工作作風」まで，中国で幅広く常識化して来た「実事求是」は，実際に基づいて真理を求める意だが，此の４字熟語の字面は，実際を是非の判断基準とする発想とも通じ合う。中国では「嘘も方便」の成語が無い故に，再起の為に毛や華国鋒に偽りの忠誠を誓った鄧小平の作戦は後味が悪いが，荘子の「此一時也，彼一時也。此亦一是非，彼亦一是非」の様な，規模の大きい方便に成る二重基準も立派に存在する。

毛の上記の「世界の枠組み」の原文は「世界格局」だが，「格」「局」は其々次元と局面を表わせる。エンゲルスに関する同時代人の評だったか，ドイツ人の発想は引き出しを多く持つ机とも似て，違う「格」（層）に別々の物を入れる類いだ，という旨の見方を読んだ憶えが有る。「機」「格」の「木・幾」「木・各」の字形と妙に合うが，中国的な思考－志向の重層性は，孔子の「智者楽水・智者動」も加味して，回転扉の様相に近い。

中国の対の思想の無限な旋回・発展は，其の構図を元とする増殖の可能性に他ならぬ。回転扉の区分も無数に有り得るが，此の論考の文脈に当て嵌まる物として，時間＋空間＋人間＋世間の諸「格」が考えられる。「間」を共有する４次元の中の過去・現在・将来，内外・大小・上下・遠近，自他・親疎・敵我，盛衰・強弱・得失……は，他次元の要素と通じ合ったり組み合ったりして，形而下の形態・意味や形而上の観念・指向を生み出す。

毛の件（くだり）の２つの考え方も，色々な含みが有り多様な解し方が出来る。例えば，内部協議と対外「表態」（意思表示）の「内外有別」，口頭発言と書面記述，「務虚」と「務実」等の要素が先ず思い当る。時間と世間の接点に在る時務を軸に考えれば，党内の政敵の暗躍跳梁→一網打尽という状況の変化が最大な要因か。彼は周の報告に耳を傾ける前に，同席の熊向暉に林彪一味の不穏な動きに就いて，１時間近くも微に入り細を穿って訊ねた。

此の会議が始まった夜半の頃には，米国使者の滞在予定の48時間が４分の１過ぎ，次の談判が翌朝に控えていた。双方の当事者が取り込まれた状況は，正しく「多少事，従来急。天地転，光陰迫」だ。後にニクソンが毛の此の句を引用したのは，左様な切迫感の共有体験が根底に有ろう。ところが，８年前に此を書いた本人は，周が談判の模様を言おうとすると，「那個不忙」（其の件は急がない）と口を挟み，熊（ゆう）に「漫談」を仕掛けた。

熊（ゆう）は対米交渉工作小組（ワーキング・グループ）の三番手だが，周の補佐官に過ぎず此の場の主役であり得ない。主席との会話が協議の半分を費やした事は，故に異様な主・次転倒に見える。但し，其の軽重緩急の優先順位は，先ず主要な問題の解決に力を入れ，副次的な問題の解決は後に回す，という毛の持説に沿う。対米接近を快く思わぬ党・軍内の実力者集団の矛が折れぬ限り，彼の国際戦略の実現どころか，大権が削がれ終焉の「大限」を迎えかねないわけだ。

系列(シリーズ)論文の前篇では指導者の「大権独攬」の必要，側近や秘書へ権限が移る事の危険に言及したが，毛は此の際の「閑話」の中でも，文書の起草も秘書に委ねるべきではないと語り，夫人を自分の「弁公室」（事務所）の責任者に据えた林彪を暗に非難した。「副統帥」の私党・「死党」（死の忠誠を尽くす徒党）の結成に，毛は党の私物化や死滅の予感を覚えた。彼の「話鋒（話の矛先）一転」は，「敵は本能寺に在り」の警戒の発露だ。

交渉結果の公表（７月15日）から間も無く，毛は政敵への包囲網を結ぶべく８月14日に南巡を始めた。更に１ヵ月後の９月13日，林彪事件が起きた。後継者が自分の権力と命を狙い，最大の外敵・ソ連への亡命を試みた事で，毛は衝撃を受け重病で倒れた。其の頃から心身の不可逆な衰退が進み，後にニクソンと会えた事も好運と言うしかない。潜在的な「命在旦夕」の危機を考えれば，先ず身辺を見詰めたのも一種の「只争朝夕」か。

中米秘密交渉の初めに毛が台湾問題を「小事」とし，本格的な達成の直前に最重要事項へ格上げしたのは，其々筋の通った話である。大陸反攻の力を失った台湾海峡の対岸の宿敵は，其こそ毛が米国を貶した様に「紙老虎(はりこのとら)」の観が強いから，内外の多くの「活火山」に比べれば，現実的な脅威の度合いが低い。故に前者の場合は，全方位戦略の中の位置付けは限定的だ。元より毛・周の対米接近は，ソ連や党内極左派に対する遠交近攻なのだ。

其の方略を最初に提案したのは，毛から国際戦略の研究を委託された４人の元帥だが，病気で参加しなかった劉伯承元帥の発想は，毛の判断や行動にも見え隠れする。戦争中の鄧小平の相棒だった彼は，こんな楽しい肉の食べ方を勧めた。先ず一切れを口に銜えて，同時に２つ目の肉を箸で挟み，更に皿の中の３つ目を睨む，と言う[38]。中国的な貪欲さが強烈に出る比喩だが，「二兎追って一兎得ず」との逆説は，此を直ちに否定し切れない。

「可上九天攬月，可下五洋捉鱉」「戦戦兢兢，如履薄氷」

日本語の「旨い汁」の譬えに当る「肥肉」の様に，其の「肉」は先ず利益の見立てだ。改革・開放後の風潮には，生活の向上を享受しながら，時代の変化に伴う不平を鳴らすのが有る。「端起飯碗吃肉，放下筷子罵娘」（膳を手にして肉を食べ，［終わると］箸を置いて愚痴を零す）と揶揄されるが，存分の「吃肉」も「罵娘」（人［此処では為政者］を罵る）も，毛沢東時代に無かった享受と自由だから，贅沢な我儘と言わざるを得ない。

劉伯承の上記の言葉の下敷き ── 「吃着碗里的，看着盤子里的」（膳の中の物を食べながら，皿の中の物を睨む）は，浮気願望や余分な野望を皮肉る諺だが，利益を確保した上で次を狙う合理主義の流儀にも成る。気力の充実を言う日本語の「脂が乗る」に対して，「肥肉(あぶらみ)」は大きな標的をも表わし，劉の「吃肉」の寓意も対敵闘争に他ならぬ。戦争で片目を失った彼(か)の「独眼龍」は，其処で「龍の伝人（後裔）」・中国人の複眼を示した。

中共は「眼前利益」と「長遠利益」，「局部利益」と「整体（全体）利益」，「個人利益」と「国家・集体（集団）利益」の「兼顧」（両立）を唱えて来た。目先・局地・個人の利益に拘る世俗的な現実主義の根強さが，裏返しで思い知れる。但し，二極を兼ねて顧みるとは正統な志向だ。「忠孝不能両全」（忠孝の両方を全うのは無理だ）は，同時に君と親に尽くす事の「両難（ジレンマ）」を突く格言だが，二者択一の勧めの裏には両立の期待も潜む。

其々時，空，人－世間の次元に在る上記の３組の利益は，多くの対極の物事と同じく両立の工夫が可能だ。中国人を現実主義者と見る向きが，内山完造やニクソンを含めて海外に多い。正しい結論に違いないが，中国社会の立派な建前との乖離を意識し過ぎると，虚の中の実を見落とす恐れも出る。高邁な理想の伝統は神格化・伝説化の反動で，虚像と見做されがちだが，此の国の巨像の重要な一面として，「紙老虎（はりこのとら）」扱いにしては行けない。

国家の利益は国と民の双方にとって，理想・現実の両面の追求なのだ。「兼顧」を説く上記の合い言葉は，突き詰めれば本音の様に思える。『論語』を含む中国の多くの指導原理も，其故に説得力と生命力を持つ。周恩来が命の果てに病床で敬意を以て聴いた毛沢東の詞（うた）・『水調歌頭・重上井崗山』（1965）には，「可上九天攬月，可下五洋捉鱉」と有る。此の豪語は周の「戦戦兢兢，如履薄氷」と，高踏の虚と低踏の実の二重奏を成す。

九天を上って月を攬（と）るのも，五洋を下って鱉（すっぽん）を捉まえるのも可能だとは，君主らしい気宇壮大な情念だ。此の詞（うた）と同時に発表された『念奴嬌・鳥児問答』（1965）の「鯤鵬展翅，九万里」は，『荘子』の書き出しが下敷きと成るが，革命根拠地・江西省井崗山に再び上った際の「可上九天攬月」は，李白の「俱懐逸興壮思飛，欲上青天攬明月」（俱に逸興を懐（いだ）いて壮思飛び，青天に上って明月を攬（と）らんと欲す。目加田誠訳）の本歌取りか。

浪漫詩人の李白・李賀・李商隠を好む事から，毛の本質が垣間見られる。突飛な「逸興」が「誤国」を招いた事も見逃せぬが，此は均衡（バランス）感覚の問題にも帰せる。抑（そもそも）老荘思想の「務虚」は，儒家観念の「務実」と補完関係に在る。「中国教」の教典の元祖・「四書五経」を吟味しても，『大学』『中庸』『論語』『孟子』や『尚書』『礼記』『春秋左伝』は勿論，神秘そうな『易経』も現実的な行動指針だし，『詩経』も散文精神に満ちている。

天下国家を論じる説教調の多い正統な教典の中に，情愛が主な題材を成す『詩経』が交じるのは，変哲の組み合わせに見えるが，聖と凡，雅と俗の重層を感じさせる。「『詩』三百篇，一言以蔽之：思無邪」と言って，孔子は其の精神陶冶の効用を讃えた。儒家の秩序維持の両輪は礼・楽だが，『詩経』は軟質の後者に属し硬質の前者を補完する。孔子は此の民謡集から礼楽の理解の手掛りを得た[39]が，元より詩は高次の思惟・表現である。

太平洋戦争勃発の３ヵ月前の御前会議で，昭和天皇は異例の発言をした。用意して来た紙片を取り出すと，「四方（よも）の海皆同胞（はらから）と思ふ世になど波風の立ち騒ぐらむ」と，二度に亘って声高々と朗詠し，「余は常に此の御製を拝誦して，明治天皇の平和愛好の御精神を紹述せんと努

めておるものである」と語った[40]。本歌の作者の大帝も日露戦争の頃に特に歌を多く披露した[41]が，重大な局面で詩歌に意志を託すのは，中国の伝統とも合う挙動だ。

ニクソンが引用した「只争朝夕」を聞いて，毛が破顔一笑したのは，心の琴線に触れた所以でもあろう。「曲径通幽処，禅房花木深。」（［唐］常建）詩歌が画竜点睛と成る此の論考は，廻り諄(くど)い寄り道をして来たが，世事や政治，指導者の奥義や奥底は，左様な「唖謎」（禅問答）に隠れがちだ。本居宣長の「しきしまの大和心を人問はば朝日に匂ふ山桜花」は，好く日本精神の縮図とされるが，中国精神の謎解きでもこんな接近は有効だ[42]。

占術や文学の領分の『易経』『詩経』は，単純に割り切れぬ事象や理外の理が多い分，他の書・経と違う独特の功徳が有る。孔子は『詩経』の「思無邪」を讃えたが，一見無邪気な思念も深遠な思慮を包含し，実用的な人生哲学の教示たり得る。一部の率直な慕情の吐露は，「大雅之堂」に登り難い様だが，『詩経』の部類には『大雅』が有る。其の中の『抑』（重々しい威儀）に出た「投我以桃，報之以李」は，今も中国人の常識である。

桃を贈られれば李で返す発想は，『礼記』の「来而不往，非礼也」と同じく，贈答文化の根底を成す交際原理だ。此の「投桃報李」の原型は，『詩経・国風』の圧巻・『木瓜』の「投我以木瓜，報之以瓊琚，匪報也，永以為好也」だ。果物を投げ与えた女性の求愛に対して，佩玉を贈る形で承諾する男性は，返礼ではなく永遠な修好の為だと言う。即物的な礼の交換を超越した無償性の主張の裏に，より高い価値を求める目的意識が散ら付く。

対米秘密交渉の先鋒に軍の情報責任者を当てたのは，情報を生命線とする兵家の布石だ。中国思想の伝統に於いて兵家と対蹠の儒家は，「情報」の字面の様に感情→「回報」（見返り）の思考回路を持つ。『詩経』にも感情と勘定，私情原理と市場原理が内包され，淑(しと)やかな片思いと強(したた)かな駆け引きが同居する。中華民族の叡知は複雑で成熟した情欲が育まれた女体と譬えられたが，女性の作品の多い此の詩歌集は其の母胎の一部に該当する。

熟語の「少不看『水滸』，老不看『三国』」（若者は『水滸伝』を読むべからず，年寄りは『三国演義』を読むべからず）は，前者の真似で造反を企み後者の真似で謀略を弄じる事への支配者の懸念に由来し，少年の好色・壮年の「好闘」・老年の「好得」を戒める君子の道にも通じる。古典文学の「四大奇書」は此の２作と，愛欲が溢れる『金瓶梅』，死闘を繰り返す『西遊記』から成るが，此等は全て毒素と美味を持つ河豚の様な物だ。

『西遊記』は其の中で最も初心(うぶ)度が高いが，「文革」の点火に利用された事は，文を凌ぐ野の力を物語っている。天界の柱に見える如来仏の指へ放尿した孫悟空は，紅衛兵の造反や毛の「聊発少年狂」「猴気」の祖型に当る。内山完造が礼賛した平和の目的や文化の香りとは裏腹に，秩序維持の為に玉皇大帝が彼(か)の猴に鎮圧を断行した一齣も含めて，中共の「闘争の哲学」や中国の激動の歴史に満ちた「火薬味」が，此の物語の真髄と見所だ。

開放・改革の護送艦隊を自任した軍総政治部主任の態度は，実力を誇示する僭越として鄧を

怒らせたが，彼（か）の高尚な「西天取経」も，武装護送を抜きにしては出来まい。唐僧と孫悟空や俗物・猪八戒の一行は，正に鼠捕りの「白猫・黒猫」集団だ。『国際歌（インタナショナル）』の「立ち上がれ，全世界の苦しめる人々よ」の中国語訳は，当初は「起来，全世界的罪人」と言う。罪人が英雄や主役と成ったのは，『水滸伝』の宋江と『金瓶梅』の西門慶も同じだ。

妾を殺して服役中の宋江は酔った勢いで謀反の詩を書き，死罪を問われる破目と成った。周恩来の「革命の為なら娼婦や妾に成っても良い」主義と好一対だが，彼は命を革められる難から逃れようと，髪を散乱させ便所の屎尿の中に転げ廻り瘋癲の言動を演じた。[43]『三国演義』にも重病・難聴を装い政敵を騙す話が有る[44]が，狂言の役者が梁山泊の首領に推された事は，ニクソンの「指導力＝倫理的には中性的な力と機略」説を裏付けた。

『水滸伝』は何も「少年狂」だけでなく，「謀反」の語順の通り「兵不厭詐」の謀略も一杯出る。中華民族の複雑で成熟した叡知は，数度の姦淫や離縁に由って育まれた物だ，と武田泰淳は言った。私生活で離婚を数度経験した毛と鄧[45]は「文革」中，正に『三国演義』の「分久必合，合久必分」の定理を体現した。「離縁」には振られる場合と振る場合が考えられ，侵略等の蹂躙と解されがちの「姦淫」も，古典の示唆から新釈が思い付く。

「万悪淫為首」の建前を嘲笑う様に，『水滸伝』から派生した『金瓶梅』の主人公は，淫夫・西門慶と淫婦・潘金蓮だ。西門が潘を物にした過程は，複数の「奇書」が例外的に共有した話と成るが，其の口説き方は「投桃報李」を超えて，「投石問路」（石橋を敲いて渡ること）の手本と言える。色男の「色胆包天」の不羈不敵と知恵袋・王婆の深謀遠慮は，少壮の貪欲と熟年の練達，野と文の対を成すが，後者の精巧が成功をもたらした。

相手の出方を探りつつ一歩一歩肉迫し，床入り（ベッド・イン）へ持って行く10段階作戦は，孔明並みの誉れが得られぬとしても，孫子の女子兵隊の教練[46]より一枚上だ，と立案者の王婆は自賛した[47]。失敗回避（リスク・ヘッジ）を先行し成果を狙う韜晦は，正に「上九天攬月」を目指す「履薄氷」の積み重ねだ。其の老獪さは『孫子兵法・虚実篇』の言の通り，「微乎微乎，至於無形。神乎神乎，至於無声。」（微妙，微妙，最高は無形だ。神秘，神秘，最高は無声だ。）

「高瞻遠嘱」「明察秋毫」の複眼

系列（シリーズ）論文に出た孔明，孫子，「微型聖人」等の話は此処で交錯したが，九割の勝算を表わす王婆の「十拿九捉」は，鄧小平の鼠の拿捕・捕捉の比喩と通じる。ニクソンは機会を掴む毛の機敏を讃えたが，中国語の「把握」は動詞として「捉える。掴む」，名詞として「勝算」の意を持つ。「勝算」の字面は，計算を勝利の前提と成す原理の表徴に見える。王婆は兵家の祖師を引き合いに出したが，『孫子兵法』の第１章は他ならぬ『計篇』だ。

其の中の「兵者，詭道也。……攻其無備，出其不意」の次の一節に，「多算勝，少算不勝，

而況於無算也。吾以此観之，勝負見矣」」（計算［勝算］が多ければ勝ち，少なければ勝てず，無ければ論外だ。私は此を観て勝負を見極める）と有る。「偉大，光栄，正確的中国共産党万歳」と「戦無不勝的毛沢東思想万歳」を，其の勝負の視点から考えれば，「正確」（正しい）は政党の性質だけでなく，百戦百勝を導く計算にも言う気がした。

毛は『水滸』より『三国』を好み，『水滸』の中でも諜報戦を含む機略，言わば『三国』的な処を重宝した。２度の失敗を経て偵察と計算が奏功し祝家荘を落城させた戦例は，調査・研究の重要性を説く彼の論拠に使われた。後出の「機動・詭道」「勝機・商機」の伏線に成るが，『呉学究双用連環計　宋公明三打祝家荘』に出た「賺」（欺く）[48] は，一般的に「儲ける」意だ。其の「貝・兼」の字形は，「貪貨」と「兼顧」の対に跨がる。

「学究」・呉用（ウーヨン）の名は「無用（ウーヨン）」と同音だが，其の重みと貢献度は荘子の「無用の大用」の好例に成る。梁山泊好漢の順位には，指導者や指導力に関する中国の価値体系が窺える。「天罡星」36名の上位４人は，「天魁星呼保義宋江・天罡星玉麒麟盧俊義・天機星智多星呉用・天閑星入雲龍公孫勝」で，武将の筆頭なる「天勇星大刀関勝」は，「掌管機密軍師」の呉・公孫に次ぐ。「地煞星」72名の１番も，「地魁星神機軍師朱武」である。

「三徳」の仁・智・勇の価値順位[49] は，劉備，孔明，関羽・張飛の序列にも見当る。毛は政権を生む「槍（てっぽう）」の力を説いたが，其の銃も力の一本槍ではなく機略を含む。『毛主席語録』の第８章・『人民戦争』の前は，『帝国主義和一切反動派都是紙老虎』（帝国主義と全ての反動派は張り子の虎だ），『敢於闘争，敢於勝利』（敢然と闘争し，敢然と勝利を勝ち取る）だが，第１章・『共産党』の結びに，「政策と策略は党の生命だ」と有る。

毛は建国後，高級幹部に『金瓶梅』と『紅楼夢』を勧めた。奇想天外な推薦と思われるが，２作とも彼が言う様に歴史の教材だ。派手な淫行が目を引く『金瓶梅』は，妻妾同居の故の微妙な人間関係や経済活動も見処だ。『紅楼夢』は好く『源氏物語』と比べられるが，繊細な情緒の持ち主・林黛玉の悲劇は，現実主義の主導的な優位の証だ。妻・宝釵と妾・襲人の「心計」も，毛が誉めた王熙鳳の財政再建の辣腕も，今日的な教示に富む。

ニクソンが指導者論で触れた色男・金・力・機略は，此等の中国古典文学名作に出揃った。『詩経』に「云誰之思，西方美人」（意中の人は誰かと云うと，西方の美人だ）と有る。西方（にしがわ）の美国（アメリカ）に対する毛・周と老元帥等の接近は，『水滸伝』の例の老練な画策と重なる。中国の多くの「暗送秋波」は結局，東洋的な繊細過ぎる消息（メッセージ）として伝わらなかった。但し，決定打の卓越した卓球外交の「抽送」[50] は，激越にして精巧な二刀流である。

毛沢東の詩歌の「革命的現実主義・革命的浪漫主義」の結合は長い間，中共の文芸理念と成った。現実・浪漫の対極は中国社会の原理にも有るし，「革命」「主義」の様な主眼も注目に値する。小田実は巨視的・微視的な物の見方を「鷹の眼・蟻の目」と譬えたが，鷹も獲物を追う際は電脳（コンピュータ）付きの空対地導弾（ミサイル）の如く，刻々と軌道を微調整する視点も持ち合わせる。方向を堅

持した上での馳駆時の逐次修正は，昨今の中国の歩みに見られている。

魯迅は日本的な緻密さを称賛し，同胞の「馬馬虎虎」（いい加減）を貶したが，中国的な大雑把さは良い加減をもたらし得る。「大而化之」（大きくして化(ば)かす）は今や専ら，大きな言辞や構えでお茶を濁す事に言うが，出典の『孟子・尽心章下』では高い境地とされた。「充実之謂美，充実而有光輝之謂大，大而化之之謂聖，聖而不可知之之謂神」という抽象への昇華は，中国流の「務虚」と同じく，空虚に終始する「空対空」とは限らぬ。

蒋介石は抗日戦争が勝利した時に，日本人への報復を自制するよう国人に呼び掛けた。演説の中の「不念旧悪」（過去の罪悪は何時(いつ)までも念(おも)うな），「與人為善」（人の為に善を為せ）より，熟語の「以徳報怨」（徳を以て怨みに報いよ）の方が後に，敗戦国・日本に対する国民党政権の基本態度として語り継がれた[51]。孔子は弟子の「以徳報怨」に対して，「以直（＝正直）報怨」と主張したので，聖人をも凌ぐ善人の優しさと言えよう。

基督教徒の彼は「敵を愛せよ」と説いたが，人道主義・博愛精神の見地と共に，「冤冤相報」（怨恨・報復が怨恨・報復を呼ぶこと）への忌避も明言した。日本への戦争賠償請求を放棄したのも，「永以為好也」の腹積りと通じて，一時の代償を払って恒久の「回報(リターン)」を望む決断だ。言わば一万年の安寧を期して，敢えて一朝一夕を争わぬ「大而化之」だ。其の擬似無償の絡繰(からくり)は，白と黒，清と濁，熱と冷が入り込んだ「怪圏(メビウスのわ)」の観が有る。

『道徳経』に出た「報怨以徳」も，逆説・正論の両面を持つ。「為無為，事無事，味無味」（無為を為し，無事を事とし，無味を味わう）で始まる章の中で，此の４字熟語の前と後は，「大小多少」（小を大とし少を多とし），「図難於其易，為大於其細。天下難事，必作於易。天下大事，必作於細」（難事は其が容易(たやす)い内に図り，大事は其が小さい内に為す。天下の難事は必ず容易(たやす)い事に始まり，天下の大事は必ず小さい事に始まる）と言う。

同じ第63章の次の「是以聖人，終不為大，故能成其大」（是以て聖人は，決して大と成ろうとせず，其故に大と成るのだ[52]）は，34章の「以其終不自為大，故能成其大」（其の偉大さを自ら顕示せず，故に其の偉大さは完全と成るのだ[53]）と通じる。完美な結果に繋がる後者の美徳に対して，前者は遠大な目標を目指す迂回の実現過程にも言う。中共の「謙虚・謹慎・戒驕・戒躁」も，無欲と大欲，虚心と能動の両面を持つ合い言葉か。

決着は１万年後に待っても構わぬ，と毛が悠長な構えを見せた中ソ思想戦争の中で，中共は『道徳経』第64章の「合抱之木，生於毫末。九層之台，起於累土。千里之行，始於足下」を引いた。『西遊記』の「万里長征」も，遠大な理想を一歩一歩具体化した壮挙だ。晩年の毛は故郷の滴水洞別荘で雄大な青写真を描いたが，同音逆意の「豪(ハオ)・毫(ハオ)」の対と絡んで言えば，気宇壮大と「滴水不漏」，「高瞻遠矚」と「明察秋毫」の両立は可能だ。

最後の対は「文革」中，好く毛沢東礼賛に使われた。「高瞻遠矚」は『角川大字源』にも見当らず，日本では馴染みが無いが，高遠な識見を持つ事に言う最大級の成語だ。『詩経』の複

数の処に出た「瞻」は，『角川大字源』の解の通り，「意符の目（め）と，音符の詹（セン）（うかがう意＝覘（セン））とから成る。目を上の方に向けてうかがい見る，見上げる意」で，「みる。ア見上げる。仰ぎ見る。イ見て調べる。ウ前方を見る」等の多義を持つ。

アの用例の「瞻二彼日月-」（『詩経・邶・雄雉』）を思えば，「高瞻」と毛を太陽に譬える見方との矛盾に気付くが，足が地に着く事の証とも取れる。「占」と同音で字形の解に「覘」が出る「瞻」は，巡り巡って『易経』と通じる。語意に関して言えば，「窺測方向」（方向を窺い測ること）は，「機会主義」（日和見主義）の投機や韜晦を貶す意が強いが，機会を掴む毛の「只争朝夕」主義は，進路を切り開く為に必要な機知・機略だ。

ウの用例の「瞻前顧後」は，「①前後をよく見る。行動に手落ちのないよう熟慮する。〔楚辞・離騒〕“ 瞻前而顧後兮 ”②物事をするのにためらいがちである。〔語類八〕“ 若瞻前顧後，便做不レ成 ”」（『角川大字源』）だ。今の中国で後者が広く使われる事は，俊英・俊敏を形容する「高材疾足」（背が高く足が速いこと）が示す様な，一層の高・速を追う進取精神の反映に思えるが，最古の語源は前進の為の安全運転の方に重みを置く。

毛が田中角栄に『楚辞集註』を贈った事は，同郷の屈原への偏愛と見られたが，壮烈な憤死で名を残した彼（か）の憂国の浪漫詩人も，「路漫々兮修遠矣，吾将上下而求索」と，道程の迂遠と探求の艱難を覚悟しただけに，危ない橋を慎重に渡る一面も有った。「高材疾足」の出典は，『史記・淮陰候伝』の「高材疾足，先得也」だが，「捷足先登」（一足先に目的地に達する）の先手必勝より，「決不出頭」の後手必勝の勝率が高い場合も多い。

今の日本で専ら諦める事に言う「諦観」は，「①入念に見ること。つまびらかに見ること。諦視。②〔仏〕明らかに真理を観察すること。⇒たいかん」（『広辞苑』）が原義だ。積極的，大乗的な語意を兼ねるのは，日本の禅語 ── 「照顧脚下」（足元を見詰めよ。＝①安全に留意し行動を慎め；②己れの内から真理を発見せよ）も同じだ。林彪亡命の飛行機の撃墜を諦めた毛の決断も，得失を一瞬の内に計算し尽くした上での泰然・淡然だ。

撃墜の大義名分で躊躇した周恩来の心境[54] も，民衆への義務感より歴史への責任感が強いはずだ。其の天秤は「眼前利益」「局部利益」ではなく，「長遠」・全体の利益の方に傾いたわけだ。雲と泥を跨ぐ「高瞻遠矚」は，宮本武蔵の二刀流の「軟件（ソフトウェア）」 ── 「遠山の目」に近い。無欲・無心に見える其の高遠は，無防備の「高枕無憂」と違って，将来の「近憂」（直ぐ現われる憂慮）を防ぐ遠慮であり，目先の脅威も即座に退く利器である。

（以下，次号に続く）

2000．4．5（中国の「鬼祭」・清明節。「ブッチホン首相」・小渕恵三［62歳］が脳梗塞で倒れた結果，政権が交替した日）

［解題］此の論考は，『「生於憂患，死於安楽」：当代日中指導者の緊張感の比較』（本誌11巻３号）を始めとする，指導者の条件に就いての系列（シリーズ）論文の一環だ。紙幅を食う重複を避ける為に，既出の記述は一部「前出」の形で処理し，註も一部敢えて省略した。

註

１）３）９）20）32）リチャード・ニクソン『指導者とは』，徳岡孝夫訳，文芸春秋，1986年（原題『ＬＥＡＤＥＲＳ』，原典1982年），45，372，329，275，266頁。

２）早坂茂三『駕籠に乗る人・担ぐ人 ── 自民党裏面史に学ぶ』，祥伝社，1988年，154～156頁。著者は1983年の岸を84歳としたが，岸は1896年の生まれなのだ。因みに，『広辞苑』第４版の「岸信介」は，没年を1989年と誤記した（第５版では「1987年」と訂正）。倶に不用意な事実誤認だが，其々中国の厄年や松下幸之助の没年の話と妙に通じる。なお，岸の貪欲な肉の喰い方や田中角栄との色事談義（原書参照）も，此の論考の中の劉伯承の肉の楽しみ方や，フランス女性を巡る毛・鄧の冗談と好一対に成る。

４）ドイツ劇作家・ブレヒトの作品（1940年）名。

５）14）15）楊炳章（ベンジャミン・ヤン） 鄧 小平　政治的伝記』（原典英文，1998年），加藤洋子・加藤優子訳，朝日新聞社，1999年，103，304，305頁。

６）早坂茂三『政治家は「悪党」に限る』，文芸春秋，1995年。

７）18）早坂茂三『早坂茂三の「田中角栄」回顧録』，小学館，1987年，294，302～304頁。

８）ニクソン『ニクソン回顧録』第１部『栄光の日々』，松尾文夫・斎田一路訳。小学館，1978年（原典同），346頁。

10）経営技術研究会編著『辞世 ── 時代を駆けた110人のことば』，ぎょうせい，1999年，53頁。

11）31）36）37）陳敦徳『毛沢東・尼克松在1972』，昆侖出版社，1988年，193～198，296，199，324頁。

12）22）暁峰・明軍主編『毛沢東之謎』，中国人民大学出版社，1992年，213，78頁。

13）顧保孜『紅墻里的瞬間』，解放軍文芸出版社，1992年，212頁。

16）毎日新聞政治部『政変』，角川文庫，1986年，250頁。

17）韓素音（ハンスーイン）『長兄 ── 周恩来の生涯』，川口洋・美樹子訳，新潮社，1996年（原典1994年），346頁。

19）『高級幹部要帯頭発揚党的優良伝統』（1979年11月2日），『鄧小平文選』第２巻，221頁。此の時の鄧は75歳。因みに，彼は76歳誕生日を挟んだ1980８月21，23日，イタリア記者とのインタビューで，周恩来の「一生勤勤懇懇，任労任怨」の仕事ぶりに就いて，周の１日の勤務時間は生涯に亘って常に12時間を超え，16時間に及ぶ時も有った，と語った（同，348頁）。

21）陳湖・文源編著『毛沢東的三十険難』，貴州民族出版社，1993年，１頁。

23）内山完造『中国人の生活風景 ── 内山完造漫語』，東方書店，1979年，51～52頁。

24）王玉徳ほか著『中華神秘文化』，湖南出版社，1993年，1030～1031頁。

25）『このままでよいのか，日本の政治・経済』（1977年），ＰＨＰ総合研究所研究本部「松下幸之助発言集」編纂室編，『松下幸之助発言集４』，ＰＨＰ研究所，1991年，384頁。80歳の際に半寿の祝いを貰った事が契機で，其の時83歳だった松下幸之助は，160歳まで生きようと宣言した。なお，此の講演に出た日本の伝統精神や主体性に就いての論点は，拙文・『中国的な国家・民族自覚（ナショナル・アイデンティティー）を巡って（上）』（『立命館言語文化研究』11巻４号［2000年］）の切り口の一つと成った。

26）『なぜ』（文春文庫，1976年）の「八十の手習い ── あとがきに代えて」（246頁）で触れた様に，松下幸之助は80歳（1974年）の誕生日を迎えた時，３世紀（19，20，21）に亘って生きようと考えた。

27）「文革」初期の紅衛兵の出版物で，毛沢東は150歳まで生きられるとの「特大喜訊」を葉剣英元帥が披露したと報道された。其の葉は1986年，89歳で亡くなったが，党中央編訳局の関係者の証言に拠ると，死去の２年前に，訃告や追悼文の日本語訳が既に準備された。（上村幸治『中国　権力核心』，文芸春秋，2000年，196頁）

28）清の学者・阮葵生が『茶余客話』の中で引いた程伯子の「『論語』要冷看，『孟子』要熱読」は，読書の際の冷静な受容と感情移入の態度の典型とされる（甘英『為学之道』，広西師範大学出版社，1996年，55頁）。

29）昭和天皇は戦後，文部大臣・田中耕太郎から「教員ストライキ」に関する報告を受けた時，「熱しやすく且つ冷め易いのが，ともすれば我が国民性である」と感想を述べた。（小林吉弥『天皇のお言葉』，徳間文庫，1988年，116頁）

30）許慎『説文解字』。

33）産経新聞「毛沢東秘録」取材班『毛沢東秘録』（下），産経新聞ニュースサービス，1999年，220～222頁。

34）ウィリア・バー編『キッシンジャー「最高機密」会話録』（鈴木主税・浅岡政子訳，毎日新聞社，1999年［原典同］）では，「（キッシンジャーを指しながら）“好機の到来，好日の到来をとらえる”ですか」と訳された（94頁）。陳敦徳『毛沢東・尼克松在1972』でも，同じ意味の「毛用手指着基辛格説道：“只争朝夕。（略）”」と成る（294頁）が，筆者は次の訳を採りたい。「指着基辛格説：“只争朝夕就是他。”」（キッシンジャーを指して，「“只争朝夕”とは彼の事だ」と言った。邱石編『共和国重大事件和決策内幕』第１巻下，経済日報出版社，1997年，701，724頁。）元より中国語は「意会」（以心伝心）を要する言語であり，最晩年の毛の表現には老人特有の曖昧・不完全が目立つから，文脈に即して補完する必要が好く有る。電撃的な秘密訪中を敢行したキッシンジャーの機敏さに対する礼賛として，此の訳の方が宜しい。

35）北京を秘密裏訪問した後，北越との秘密交渉が進行中のパリで，某女性テレビ記者とデートした彼は，「職務上の活動を隠す為に私生活を利用する唯一の人間」と評された。ウォルター・アイザックソン『キッシンジャー　世界をデザインした男（上）』（別宮貞徳訳，日本放送出版協会，1994年［原典同］），499頁。此の著書の第14章・『中国』に次ぐ其の第15章・『名士 ── それらしからぬセックス・シンボル』は，主人公の「隠れプレーボーイ」の素顔に迫る内容だが，冒頭に引かれたキッシンジャーの語録 ── 「権力は究極の媚薬なり」も，此の論考の趣旨と通じる。

38）ヘンリー．Ｅ．ソールズベリー『ニュー・エンペラー　毛沢東と鄧小平の中国』，天児慧監訳，福武書店，1993年（原典＝1992年），15頁。

39）『論語・八佾』：「子夏問曰：“‘巧笑倩兮，美目盼兮，素以為絢兮。’何謂也？”子曰：“絵事後素。”曰：“礼後乎？”子曰：“起予者商也，始可與言詩已矣。”」（子夏が『詩経』の「口元に愛嬌たっぷりの笑窪，目も美しくてばっちりと，其の鮮やかな美貌を白粉で仕上げた」を引いて，意味を訊ねた。「絵を描く時に（仕上げの）白い胡粉を加える様な事だ」，と孔子は言った。「礼は後で仕上げる物ですか」，と言うと，「予を啓発してくれるのは商（子夏）だ。君こそ始めて詩（『詩経』）の話が出来る人間だ」，と答えた。）

40）田中伸尚『ドキュメント昭和天皇』第１巻『侵略』，緑風出版，1984年，137頁。

41）明治天皇は一生，和歌を10万首ほど作ったが，単年度の最高記録は日露開戦の1904年の7,526首だ。なお，件の「四方の海……」の創作時期が宣戦の前か後かは不明だ。（田所泉『歌くらべ　明治天皇と昭和天皇』，創樹社，1999年，20頁）

42）上村幸治は文献27の中で，天安門事件後の江沢民と朱鎔基が，京劇『捉放曹』の「一輪明月照窓下」と『甘露寺』の「勧千歳“殺”字休出口」を歌う形で，死者への追悼や武力鎮圧の遣り過ぎへの非難を託した，という逸話を披露した（327～329，340～341頁）。指導者の決断の内容と共に，其の言葉，表情，仕種等に着眼し，発想，理念，哲学，人生経験等を掘り下げ，本音を垣間見ようとする著者の方法論（360～361頁）は，正に前回の拙論で提起した「心跡学」の追求である。

43）施耐庵『水滸伝』第39回『潯陽楼宋江吟反詩　梁山泊戴宗伝仮信』。

44）羅貫中『三国演義』第106回『公孫淵兵敗死襄平　司馬懿病賺曹爽』。

45）毛沢東は抗日戦争中，夫人・賀子珍のソ連滞在中，江青と超法規的な同棲を始めたが，新夫人との感情にヒビが入った建国後は，庶民の様に離婚できぬ立場に愚痴を零した事が有り（文献12，153～154頁），彭徳懐を失脚させた盧山会議の期間中，賀と秘密裏会った（同165頁）。一方，鄧小平は内戦中の党内闘争で失脚した時，夫人が去って李維漢（党中央組織部長経験者）と結婚した。其の再婚相手の息子・李鉄映を中央政治局委員，副首相（現在）まで出世させた事は，鄧の非凡な度量の証とされている。（文献27，205頁等，文献多数）

46）素人の宮女を立派な兵隊に仕立てて見せるよう呉王に命じられた孫武が，命令に従わぬ王の愛妃を処刑した処，驚いた一同は烏合の衆から精鋭部隊に変貌した。

47）『水滸伝』第24回『王婆貪賄説風情　鄆哥不忿閙茶肆』。

48）「石秀的武芸不低似孫立，要賺祝家庄人，故意教孫立捉了」（石秀の武芸は孫立に劣らないが，祝家庄の者を騙す為に，故意に孫立に捉まえられた）。なお，文献43の他に，『三国演義』第21，96回の題 ── 『曹操煮酒論英雄　関公賺城斬車冑』，『孔明揮涙斬馬謖　周魴断髪賺曹休』にも，「賺」（欺く。騙す。騙し取る。）が出ている。

49）他にも様々な順位が有り，例えば，孫文は『中庸』の「智・仁・勇」を好んだ（拙論『中国的な国家・民族自覚（ナショナル・アイデンティティー）を巡って［中］』［『立命館言語文化研究』12巻２号，2000年］参照）。

50）卓球の術語として，「抽」はスマッシュ，「送」（「喂」とも言う）はフィード（ボール・パック）。

51）竹内実編『日中国交基本文献集』（下巻），蒼蒼社，1993年，124頁。蒋介石の演説（1945年８月15日）の題は，『抗戦勝利告全国軍民及世界人士書』。

52）聖人は事を未然に処理し，結果的には大きな仕事をせぬ事に成り，故に治世の大事を無事に成し遂げるのだ，とも解せる。

53）聖人は偉大な存在を以て自任せず，故に人々に尊敬され偉大な存在を成すのだ，とも解せる。

54）毛の指示を仰ぐ彼の胸中には，自分より地位の高い林を撃墜させたら，全国人民にどう説明すれば良いか，との思いが有ったらしい（文献21，217頁）。

（Xia, Gang，本学部助教授）